

『改正増補英語箋』(住田文庫蔵) 下巻の増補語彙と薩摩辞書

一「鳥」部門と「獣」部門—

下河部 行 輝

はじめに

『改正増補英語箋』は、上巻に「天文」から「数量」の十九部門、下巻に「鳥」から「果実」の七部門と、「徳不徳」から「動詞」のいわゆる品詞分類による単語を収録している和英単語集とでもいうものであるが、この名前を持つものに二種類あることは、国語学会で発表したのが、一つは東京で発行され、もう一つは大阪で発行されたもので、それぞれ夏と秋という奥付を持っている。この奥付を信じる限り、大阪版は、後になるのであるから、東京版にはない語彙は、何を資料として増補されたものなのかが問題となる。これまで、『英語箋』から収録されたものと思われるものと『薩摩辞書』から収録されたと思われるものについて、上巻に関しては『薩摩辞書』との関係を、『英語箋』に関しては、上下巻について発表してきたが、今一度、上巻における増補語彙について示してみよう。

まず、『英語箋』との関係に関して言えば、上巻では「神仏」は、『英語箋』にないので、対象にはならないが、他の部門では、関係ありとみたものは、十四部門になる。従って五部門には、『英語箋』からは増補されなかったと一応判断される。十五部門における増補語彙の数量と下巻における七部門のうち、増補のある三部門の増補語彙の数量を示すと次のようになる。

上 巻	部門	天文	地理	時令	官職	人品	身體	疾病	宮室	服飾	飲食	器用	兵語	彩色	数量	下 巻	鳥	獣	魚介
	語数	2	11	1	1	15	5	8	4	3	6	17	3	1	1		1	5	4
	増補	13	20	19	29	34	21	57	30	7	14	56	60	20	49		38	35	34

(注：表の「増補」と言うのは、各部門で東京版にはない増補語彙を意味する。以下同じ)

(注：「語数」と言うのは、『英語箋』から加えられたと思われる語彙数を指す。以下同じ)

『英語箋』から、積極的に採録された部門は、「地理」「人品」「器用」であって、下巻にあっては、まことに少ないということが出来る。しかし、五十%を越えるのは、「地理」のみであるから、全体から見て、『英語箋』からの増補は、多いとは言えない。

次に『薩摩辞書』と関係あると思われた語彙について示そう。今まで、上巻について発表してきたが、上巻の十九部門のうち、全ての部門と関わりがあり、『改正増補 英語箋』と『薩摩辞書』は深い関係があると思われる。

部門	天文	地理	時令	家倫	官職	人品	身體	疾病	宮室	服飾	飲食	器用	兵語	神仏	金属	玉石	彩色	醫藥	數量
語数	3	8	3	6	15	12	10	42	19	5	6	31	40	26	8	2	17	64	6
増補	13	20	19	10	29	34	21	57	30	4	14	56	60	26	11	3	20	70	49

「天文」から「數量」の十九部門、全体の増補語彙数は549語であるが、『薩摩辞書』から増補されたと思われる語彙数は、323語になるので、およそ58.8%が『薩摩辞書』から加えられた割合となる。50%を越える増補語彙を持つ部門は、「官職」「身體」「疾病」「宮室」「器用」「兵語」「神仏」「金属」「玉石」「彩色」「醫藥」の十一部門となり、『英語箋』の一部門に較べれば、『薩摩辞書』との関係の深さは大変大きいと言うことになる。以下、下巻について、「鳥」と「獸」の部門について示そう。

尚、各部門における項目の内、『英語箋』の項目毎の末尾の記号について、付言しておく。◎、★、☆、○の四つの記号であるが、この両書に共通している英語、漢字、英語へのカタカナルビ、漢字へのルビの四つの項目で、英語へのルビは、編者の英語にたいする発音の表記の仕方に問題があり、それ自体は当時の表記という意識についての研究が可能であるが、今は、両書の影響関係については他の三つの項目に比較すると、一次元下位の問題点と判断されるので、英語、漢字、そして漢字へのルビが、当面の対象になると思われる。従って、この項目の三者が一致するものを、◎、英語と漢字が一致するものを★、英語と漢字ルビが一致するものを☆、他のものを○とした。言うまでもなく、語彙の一般性、特殊性の問題も絡むと、三者が一致しても、必ず、両者に深い関係ありと即断はできないものであるが、一応の目安として、これを叩き台として、さらに他の文献の調査が必要であることは論を俟たないものであろう。しかし、この両書が深い関係があることは、他の論文で示してあるので、それらを参照して載きたい。

「改正増補英語箋」は〔英語箋〕、『薩摩辞書』〔薩摩〕で示すので、〔英語箋〕とは、別であることを明記しておく。

2-1 〔英語箋〕における「鳥」部門の増補語彙

- 〔英語箋〕 鷲鳥 (シチャウ) *Bird of prey*. (ボルド オフ プレイ) ○
 水鳥 (ミヅトリ) *Aquatical-bird*. (コーチカアルボルド) ★
 玄鵒 (クロツグミ) *Black-bird*. (ブレックボルド) ☆

天翁（ウドリ）*Booby*.（ブービー）〔注：天翁は信天翁のうちの信を落としたもの〕◎

鸕鶿（ヒョクドリ）*Cassuary*.（カスリアリー）〔正しくは *Cassowary*〕◎

鬥鷄（トウケイ）*Cock-fight*.（コックフワイト）◎

田鷄（ハン）〔ハはママ〕*Coot*.（コート）◎

鸕児（ハクチョウノコ）*Cygnets*.（シグネット）◎

小キ水鳥（チサキミヅトリ）*Dab-chick*.（テップチィック）◎

雄鴨（ヲガモ）*Drake*.（ドレーク）◎

鴨ノ子（カモノコ）*Duckling*.（ダックリンク）◎

牡鵝（ランガチョウ）*Gander*.（ジャンダー）★

コルコック雌（コルコックメ）*Gor-hen*.（ゴルヘン）◎

鵝ノ雛（ガテウノヒナ）*Gosling*.（ゴスリング）◎

七面鳥（シチメンチャウ）*guinea-hen*.（ギーナヘン）◎

魚狗（カワセミ）*Halcyon*.（ホラルション）◎

鸛（シキョウ）*Hawlet*.（ホラレット）◎

蜂雀（ハウジャク）*Humming-bird*.（ハンミングボルド）◎

鷹ノ子（タカノコ）*Jashawk*.（ガセフク）〔正しくは *Goshawk*〕◎

ベニス ヌメ（本文カナノミ）*Linnet*.（リンネット）◎

黄鳥（カウライウゲイス）*Loriot*.（ロリヲト）◎

鶯（カモ）*Mallard*.（モルラード）◎

白鷗（シロキカモメ）*Mew*.（ミュー）★

松鷄（フイテウ）*Moor-cock*.（ムールコック）◎

鶉雀（アオジ）*Ortolan*.（ラルトレン）◎

雌鳩（ミサゴ）*Ostray*.（オスプレー）◎

鸕鷀（ガランテウ）*Pelican*.（ペリケーン）◎

水喜鵲（チドリ）*Pewee*.（ピュエット）◎

鵲（カサ、ギ）*Pianet*.（パイネット）◎

鴉（ハシブトガラス）*Reven*.（レブン）◎〔正しくは *Raven*〕

駒鳥（コマドリ）*Red-breast*.（レッドブリースト）☆

白頬鳥（シバウカラ）*Tiltmouse*.（チットマウス）◎

鷲（ハヤブサ）*Vulture*.（バルチュール）◎

班鳩（ハンキウ）*Wood-pigeon*.（ウードピゼラン）◎

巧婦鳥 (ミソサバイ) *Wren*. (ウレエン) ◎

鷹茲鳥 (ウノトリ) *Comorant*. (コルモレント) ◎

能ク轉ル鳥 (ヨクサエツルトリ) *Warbler*. (ウワブラー) ◎

卵巢 (タマゴノス) *Matrice*. (マトライス) ★

2-2 「薩摩辞書」にみる「英語箋」に採り入れられたと思われる語彙の実態

〔薩摩〕 *Bird of prey*. (ボルドー——) 物ヲ掴 (ツカ) ミ取 (ト) リスル鳥 (トリ) ノ

惣名 (ソウミョウ) [*Prey* の項目にあり]

Aquatical-bird.s. (エカチケル——) 水鳥 (スイチョウ)

Black-bird.s. (ブラックビルツ) 鳥 (トリ) ノ名 (ナ) (クロツグミ)

Booby.s. (ブーバイ) 無作法人 (ブサハウシン) [シンーまま]。愚 (グ)

人。信天翁 (アホウドリ) (鳥之名)

Cassowary.s. (カッソウエリー) 鷓鴣 (ヒヨクドリ)

Cock-fight.s. (コックフワイト) 鬥鷄 (トウケイ)

Coot.s. (クート) 田鷄 (パン)

Cygnets.s. (シグ子ット) 鵞 (ハクチョウ) ノ児 (コ)

Dab-chick.s. (ダブチック) 小キ水鳥 (チサキミツトリ)

Drake.s. (ドレーキ) 雄鴨 (ヲガモ)

Duckling.s. (デキユツクリン) 鴨ノ子 (カモノコ)

Gunder.s. (ガンドル) 牡鵝 (ヲガ)

Gor-hen. (ゴルヘン) ,S.鳥 (トリ) ノ名 (ナ) (ゴルゴックノ雌 [メ])

Gosling.s. (ゴスリン) 鵞 (ガー) ノ雛 (コ)

Guinea-hen.s. (ギニーヘン) 七面鳥 (シチメンチャウ) ノ類

Halcyon.s. (ハルション) 魚狗 (カワセミ) (鳥ノ名)

Henlet.s. (ホウレット) 鷄巢 (シキョウ)

Humming-bird.s. (ホムミンボルド) 蜂雀 (ハウジャク)

Jashawk. (ゼスホーク) 鷹 (タカ) ノ子 (コ)

Linnet.s. (リン子ット) 鳥 (トリ) ノ名 (ナ) (ベニス・メ)

Loriot.s. (ローリラット) 黃鳥 (カウライウグイス)

Mallard.s. (メルラルド) 鴨 (カモ)

Mew.s. (ミュー) 白鷗 (カモメ)。鳥 (トリ) ヲ入 (イ) レル籠 (カゴ)。

柳欄 (サクラン)。牢獄 (ロウゴク)
Moor-cock, s. (ムールコック) 松鷲 (ライテウ) ノ類
Ortolan, s. (ラルトラン) 菰雀 (アヲジ)
Ospray, s. (オスプレー) 雌鷲 (ミサゴ)
Pelican, s. (ペリカン) 鷲鷲 (ガランテウ)
Pewee, s. (ピーウェット) 水喜鷲 (チドリ)
Pianet, s. (パイエ子ット) 小サキ啄木鳥 (キツ、キ)。鷲 (カサ、ギ)
Raven, s. (レーブン) 鴉 (ハシブトガラス)
Red-breast, s. (レッドブレスト) 小鳥 (コトリ) ノ名 (ナ) (コマドリ)
Titmouse, s. (テキットモース) 白頬鳥 (シバウガラ)
Vulture, s. (ウエルチュール) 鷲 (ハヤブサ) (鷹鷲 [タカトビ] 等ノ属ニシテ別種ナリ)
Wood-pigeon, s. (ウードピジョン) 斑鷲 (ハンキウ)
Wren, s. (レン) 巧婦鳥 (ミソサバイ)
Connorant, s. (コルモレント) 飲食 (インショク) シタガル人 (ヒト)。盧茲鳥 (ウノトリ)
Warbler, s. (ウヲールブレン) 能ク囀ル鳥 (トリ)
Matrice, s. (メートリス) 卵巢 (ウンソウ)

2-3 「鳥」部門のまとめ

〔英語箋〕の方が、英語のスペルに誤りが多い。*Jashawk* は両書ともに、誤っており、逆の見方からすれば、両書の関係を物語っている。鷲鳥 (シチャウ) *Bird of prey* は、〔薩摩〕の方は *Prey* の項目の中であって、よく見ないと採録できないと思うが、句として採り入れているところが関係あるのではないかと考えて、一応、関連の語句とした。水鳥 (ミヅトリ) *Aquatical-bird*、玄鷲 (クロツグミ) *Black-bird*、牡鷲 (ランガチョウ) *Gander*、白鷲 (シロキカメメ) *Mew*、駒鳥 (コマドリ) *Red-breast*、卵巢 (タマゴノス) *Matrice* の六語は、英語は一致しているが、漢字のルビか、漢字の有無が異なっている。この内、〔玄鷲〕と〔駒鳥〕は、〔薩摩辞書〕では、漢字表記がなされておらず、かな表記のみである。一方〔ベニス ヌメ〕は、漢字表記をしてもよさそうなものであるが、どちらの書においても、かな表記である。これらの内、〔玄鷲〕と〔駒鳥〕は、〔薩摩辞書〕では、「鳥ノ名」の説明が加わっていて、一致している〔ベニス ヌメ〕と「ゴルゴックノ雌」も「鳥ノ名」の注記のあるものである。両書が関係ある証左としたものの一つとするのもこ

こにある。さらに、*Booby* の訳語として「天翁」とあるが、実は、『薩摩辞書』では次のようになっている。

Booby (ブーバイ) ,s. 無作法人。(ブサハウシン) 愚(グ) 人。信(アホ)

天翁(ウドリ)(鳥の名)

〔英語箋〕では、「天翁(ウドリ)」としており、これは、『薩摩辞書』の前の行の「信(アホ)」を見落としていることを示している。特に「(鳥の名)〔後の括弧はない。〕」に注目したための早合点と受け取れる。逆に言えば、両書の間を物語っている証左となるものと思われる。

3-1 〔英語箋〕における「獣」部門の増補語彙

「獣」

〔英語箋〕 狼(ヲ、カメ) *Wolf*. (ウーフ) ◎

荷馬(ニムマ) *Pack-horse*. (バックホールス) ◎

羊仔(コヒツジ) *Lamb*. (リーム) ☆

豹駝(ヒヨウダ) *Camelopard*. (ケメロバード) ◎

牡亥(ヲブタ) *Boar*. (ボーア) 〔「ボ」ママ〕 ☆

乳嚙(チシカ) *Chyle*. (チャイル) ◎

老猫(ライ子コ) *Gib-cut*. (キブケット) 〔「キ」ママ〕 ◎

狩犬(カリイス) *Harrier*. (ハーリア) ◎

牝鹿ノ子(メジカノコ) *Hindcalf*. (ハインドケーフ) ◎

家犬(カイイス) *House-dog*. (ハウスドグ) 〔「ドク」ママ〕 ◎

拂菻狗(チン) *Lap-dog*. (レップドグ) 〔「ドク」ママ〕 ◎

兎ノ子(ウサギノコ) *Leveret*. (レバレット) ◎

豹(ヒョウ) *Leopard*. (レヲバード) ◎

牝獅子(メジ) *Lioness*. (ライヲネッス) ◎

児牝馬(コメムマ) *Mare-colt*. (メールコート) ◎

麋(ヲ、ジカ) *Moose*. (ムース) ◎

海牛(セイウチ) *Morse*. (モールス) ◎

子馬(コムマ) *Pony*. (ポニー) ◎

牝驢馬(メウサギムマ) *She-ass*. (シーエッス) ☆

若キ奄牛(ワカキキンキリウシ) *Steer*. (スチア) ◎

牡猫(ヲ子コ) *Tomcat*. (トムケット) ◎

軍馬 (グンバ) *War-horse*. (ウラーア・ホールス) ★
 閹羊 (キンキリヒツシ) [「シ」ママ] *Wether*. (ウエサー) ◎
 天竺鼠 (テンヂク子ツミ) [「ツ」ママ] *Guinea-pig*. (キューニーピッグ)
 ◎
 水鼠 (ミズ子ツミ) *Craber*. (コレバア) ◎
 鵝陂 (モグラ) *Mouldwarp*. (マウルドラプ) ◎
 鹿ノ角 (シカノツノ) *Hartshorn*. (ハーツホラン) ◎
 馬ノ毛 (ムマノケ) *Horse-hair*. (ホールスヘヤア) ◎
 膠 (ニカワ) *Glue*. (クルウ) [「ク」ママ] ◎
 足 (アシ) *Paws*. (ボウス) ◎

3-2 「薩摩辞書」にみる〔英語箋〕に採り入れられたと思われる語彙の実態

〔薩摩〕 *Wolf*,s. (ウラルフ) 狼 (ヲ、カメ)
Pack-horse,s. (パックホールス) 荷馬 (ニムマ)
Lamb,s. (ラム) 羊仔 (コヒツジ)
Camelopard,s. (ケメロバアルド) 豹駝 (ヒョウダ) [亞國ニ産スル獸]
Boar,s. (ボール) 牡豚 (ヲブタ)
Chyle,s. (カイル) 乳漿 (チシカ)
Gib-cat,s. (ヂッボカット) 老猫 (ヲヒ子コ)
Harrier,s. (ハルリエル) 狩犬 (カリイヌ)
Hindcalf,s. (ハインドカーフ) 牝鹿ノ子 (メシカノコ)
Howse-dog,s. (ハウスドグ) 家犬 (カヒイヌ)
Lap-dog,s. (ラップドグ) 拂菻狗 (チン) [漢字には振りがなはせず示した通りに漢字の後に括弧で説明している。]
Leveret,s. (レウエレット) 兎ノ子 (ウサギノコ)
Leopard,s. (レパルド) 豹 (ヒョウ)
Lioness,s. (ライヲネス) 牝獅子 (メシ、)
Mare-colt,s. (メールコールト) 児牝馬 (コメムマ)
Moose,s. (ムース) 麋 (オホシカ)
Morse,s. (モールス) 海牛 (セイウチ) (海獸 [カイジウ] ノ名)
Pony,s. (ポーニー) 子馬 (コムマ)

She-ass.s. (ルビナシ) 驢馬 (ロバ) ノ牝
Steer.s. (ステル) 若 (ワカ) キ飼牛 (キンキリウシ)
Tomcat.s. (トムカット) 牡猫 (ヲ子コ)
War-horse.e. (ウヲールホールス) 軍馬 (グンムマ)
Wether.s. (ウエゾル) 閼羊 (キンキリヒツジ) [キンマリーママ]
Guinea-pig.s. (ギニーピグ) 天竺鼠 (テンジクネズミ) (俗に誤テモルモット
 ト云)
Craber.s. (クレーブル) 水鼠 (ミヅネズミ)
Mouldwarp.s. (モールドウワープ) 鰻鼠 (モグラ)
Hartshorn.s. (ハーツホルン) 鹿 (シカ) ノ角 (ツノ)
Horse-hair.s. (ホールスヘール) 馬ノ毛 (ケ)
Glue.s. (グリュウ) 膠 (ニカワ)
Paws.s. (ポー) 足 (アシ) (獣〔ケモノ〕ノ)。手 (テ) (罵〔ノ、シ〕ル語)

3-3 「獣」部門のまとめ

この部門の両者における相違は、「羊仔と子羊」、「牡亥と牡豚」、が漢字表記において「仔と子」「亥と豚」である。訓がそのまま、「コヒツジ」となっていて、「ヒツジノコ」とはしないところが、影響がありはしないかと思われる。「亥と豚」であるが、〔英語箋〕では、「ブタ」に対して「亥」の漢字を当てており、〔薩摩〕でも、「ブタ」は「豚」であるから、それなりにそれぞれが一貫した表記ということになるが、訓からの影響ありとして処置したが、問題が解消したとはいえないのだが、一応、影響あるものとして掲げて置く。「牡驢馬」と「軍馬」の訓が、両者の相違であるが、子細に観察すれば〔英語箋〕の「牡驢馬」は、〔薩摩〕では、「牡驢馬ノ牝」なので、厳密に云えば、一致しているとは言えない。〔英語箋〕は、単語にする意識が、〔薩摩〕よりも多いので、一応、影響あるものとして今は、暫くこのままにして置く。他は、原則の三点に叶うのであるが、一般的な語彙については、一致としていいかどうかは、他の部門同様のことであって、難しいものを抱えてはいるが、全体的な見地から、影響あるものとして処置して置く。この部門で、問題なのは、(キンキリヒツジ)〔英語箋〕と(キンマリヒツジ)〔薩摩〕であるが、(キンマリ)という語彙が日本語に存在するものかどうかが問題である。意味から云って、(キンマリ)では「去勢」の意味が出てこないからである。それ故、活字のミスと判断して同じものとして処理した。

この小論の結び

下巻の部門は、「徳不徳」以下の品詞の部門を除けば、七部門である。「鳥」「獣」「魚介」「虫」「草」「木」「果實」がそれらである。今、紙幅の都合で二部門のみを示したが、『改正増補英語箋』の「鳥」と「獣」の部門で増補されたものは、上述した「英語箋」のそれぞれの増補語彙だけではなく、実際は、『薩摩辞書』と関係ないと思われるものを入れると、「鳥」では、三八語、「獣」では、三五語である。「鳥」は三八語全て、『薩摩辞書』と関わったものとしたが、「獣」では、他に、五語ある。今、「獣」の増補語彙で、列挙しなかったものを示すと次の通りである。

「獣」部門の他の増補語彙

「車に付ル馬」(クルマニツケルマ) *Coach-horse*. (コーチ ホールス)

「乗馬」(ノリムマ) *Saddle-horse*. (セッドル ホールス)

「借馬」(シャクバ) *Hack*. (ヘック)

「牝熊」(メグマ) *She-bear*. (シー ビア)

「野牛」(ノウシ) *Goat*. (ゴート) [正しくは、*Goat*. は、山羊でなければならない。]

これら五語に対する『薩摩辞書』の実態は、どのようなものかを参考に示そう。

「薩摩辞書」の訳語

「*Coach-horse*.」(コラーチ ホールス) 同上ヲ引ク馬(ヒクムマ)

この同上というのは *Coach*- の訳語が「輪(ワ) 四(ヨ) ツアリテ屋根(ヤネ) アル乗車(ノリモノ)」を受けたものである。

「*Saddle-horse*.」この語は『薩摩辞書』(初版) にない。

「*Hack*.」(ハック) 借料(カリリョウ) 出(ダ) シテ借(カ) ル馬(ムマ)。同上ノ乗車(ノリグルマ)。切(キ) レ目(メ)

「*She-bear*.」この形態では、『薩摩辞書』では見出しにはなく、「*bear*.」の項目の中に「*She bear*」とあって、「牝熊(メクマ)」の訳語が当てられている。訓みは、『薩摩』の訓みを合成すると(シー ビエール)となる。これを入れるとこの語は『薩摩辞書』との関わりある語彙となる。

「*Goat*.」(ゴート) 山羊(ヤギ) (牝牡〔メオ〕共に用ユ)

「英語箋」から採り入れた語彙で「鳥」部門の語は、「盧茲鳥」だけであるから、これは、一応『薩摩辞書』とダブルことになるので、実際単独では、三七語が、『薩摩辞書』からということになる。「獣」部門では、『英語箋』からは五語であるが、これも、一応

彙報

会員の研究成果が関わっている二つの雑誌の第三弾の刊行を左記に紹介します。次号のさらなる精進を期待します。

洋学資料による日本文化史の研究Ⅲ

吉備洋学資料研究会編

蘭学重宝記の不可思議

下山 純正

「六物新志」の「対訳」「義訳」「直訳」

大友 信一

宇田川榛斎の未刊訳本「新訳帝田内外治療書」

中山 沃

フランカールト内科書および解剖図説

高橋 輝和

開成所教授・市川斎宮のドイツ語

石田 純郎

ハイステルとユールホールン

品子添削敦夫歌稿

書簡研究 第三号

岡山手紙を読む会編

「奥の細道」への出発を報じた芭蕉の元禄二年春の伊賀

香取秀真

門人宛書簡の扱いについて

与謝野寛

藤井高尙の靈祭と歌会

橋本徳寿

—新資料による考察を中心として—

福沢諭吉書簡・補遺

江戸後期地方文人の旅と交遊

石上 敏

—手紙と交際録から—

上村敦之著

徳島慶応義塾時代の森田思軒

片山 新助

—明治八・九年の往復書簡—

富岡 敬之

大塚楠緒子の文芸活動と与謝野品子

—品子宛書簡の紹介—

貝原 章子

松浦辰男晩年の書簡と井上通泰

—「フケば飛ぶやうな叙景歌」をめぐる—

津村信夫への書簡に見る丸山蕉

吉崎志保子

諸家書簡集—新資料の紹介—

下河部行輝

菅茶山

菅波 寛

菅茶山

片山 新助

菅茶山

菅波 寛

浦上春琴

斎藤 孝

平田鉄胤

井上啓治・赤羽学・水戸純子

藤井高雅

工藤進思郎

品子添削敦夫歌稿

赤羽 淑

佐佐木信綱

神崎久美子

香取秀真

川野 良

与謝野寛

石上 敏

橋本徳寿

岡 佳子

福沢諭吉書簡・補遺

石上 敏

◇「平家物語の鑑賞」(正・続)

上村敦之著

残部が若干あり、希望者は著者宛直接申し込み下さい。

頒価 正統で二千円。正二〇二頁、統三〇四頁。

〔住所〕七〇八 津山市城代町二〇二